

女子中学生におけるインターネット利用の現状と インターネット依存とメンタルヘルス上の問題との関連

山脇 彩¹⁾ 小倉 正義²⁾ 濱田 祥子³⁾
本城 秀次⁴⁾ 金子 一史⁴⁾

1. 問題と目的

近年、インターネット（以下、ネット）が幅広く普及するのに伴って、ネットの様々な影響が報告されるようになってきた。平成22年末におけるネットの人口普及率は78.2%と、約8割に上っている（総務省統計局, 2011）。勉強や就職活動における情報収集だけでなく、最近では物を売買したり友人を作ったりと、ネットが様々な形で用いられるようになってきている。先行研究では、ネットを利用することにより、対人不安の低減（安藤・坂元・鈴木・森, 2003）や孤独感・抑うつ感の低減（Shaw & Gant, 2002）、ソーシャルスキルや問題解決スキルの向上（鈴木・坂元・小林・安藤・檀淵・木村, 2003）などが報告されている。その一方、不安・抑うつ（佐藤・中島・木道・山田, 2006）、孤独感および対人ストレスの増加（金, 2007）、ネットに対する自己制御の困難やネットの利用を中止することによる焦燥感の高まり（袖山・畑中・堀・朝田, 2003）など、ネットによる悪影響も指摘されている。

ネットによる悪影響として近年研究されているテーマの1つに、ネット依存が挙げられる。ネットには嗜癖を生じさせやすい要素があり（安藤, 1999）、長時間のネットへの接続は健康を害し、極めて危険な状態に陥る可能性がある（春日・伊藤, 2004；高石, 2006）。ネットへの依存は、インターネット依存（以下、ネット依存）として検討されている。Young（1998 / 1998）は、ネット依存について、寝食を忘れてネットにのめりこんだり、ネットの利用をやめられないと感じたりする、ネットに精神的に依存した状態と定義している。アメリカ精神

医学会による診断分類であるDSM-IV-TR（American Psychiatric Association, 2000）では、「312.30 特定不能の衝動制御の障害」に分類される。ネット依存を直接扱った研究としては、ネット依存傾向と日常的精神健康との関連や、ネット依存傾向プロセスの検討がなされている（鄭, 2008；鄭・野島, 2008）。海外では、ネット依存とADHD（Yoo, Cho & Ha, 2004）、抑うつ（Ha, Kim, Bae, Bae, Kim, Sim, Lyoo & Cho, 2007）、衝動性（Cao, Su, Liu & Gao, 2007）、社会恐怖および敵意（Yen, Ko, Yen, Wu & Yang, 2007）などとの関連が検討されている。特に韓国や中国では、ネット依存による社会的な問題が多発したこともあり、ネット依存の研究が盛んである。今後、日本においてもネット依存による社会的問題が増加してくると予測できるため、ネット依存に関する研究を行うことには大きな意義があると考えられる。文部科学省（2002）の調査でも、ネット依存はギャンブルや買い物依存と同様、行為の過程への依存とみなされ、調査・研究の必要性が指摘されている。

ネット依存は、大人だけでなくネットを利用し始める時期となる中学生においても、近年問題になっている。高田・西田（2003）の調査では、中学生でネットの利用経験率が上昇し、中学生の95%以上がネットを利用したことがあると報告している。現在の中学生は、遊びの約束や連絡網などのためにネットを使用している。そのため、友人関係を維持するためにネットを手放すことができず、昼夜ネットにかじりついたりしている生徒もいる。時には、クラスの裏コミュニティがいじめの温床になることもある。従って、中学生を対象にネットの問題を検討することは、喫緊の課題となっている。中学生を対象にした先行研究では、ネット使用と敵意（高比良・安藤・坂元, 2004）、友人との密着性（安藤・高比良・坂元, 2008）、解離性（中西, 2005）との関係などが検討されている。また、ネットいじめに関する研究もなされている（内海, 2010；寺戸・永浦・富永, 2010）。ネットの適度な使用は子どもに良好な影響を与える一方で過

- 1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）（指導教員：金子一史准教授）
- 2) 鳴門教育大学大学院学校教育研究科
- 3) 愛知淑徳大学学生相談室
- 4) 名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター

度な使用は悪影響となること (Willoughby, 2008), 中学生においてネット使用者が増加し依存傾向が急激に高まること (戸部・堀田・竹内, 2010), ネット使用が不登校からひきこもりへのプロセスを助長させること (人見, 2006), などが報告されている。近年, 中学生に対するネットの悪影響がようやく注目され始めたばかりである。現在でもプロフィールやゲームなどに魅力を感じている中学生は多く, 今後ますますネットにのめりこんでいく中学生が増えると予測される。しかし, 中学生を対象にしてネット依存に注目した研究は, ほとんど行われていない。

なお, 先行研究ではネットの利用頻度や利用内容などに関して性差が指摘されている。女子の方がメール・チャット・ブログ・プロフ・掲示板すべてにおいて利用頻度が多いこと (寺戸他, 2010), コミュニケーション系のアプリケーションの経験者が多いこと (高田・西田, 2003), 携帯電話でのネット利用時間が長いこと (内海, 2010) が指摘されている。更に小学校高学年以降, 男子に比べて女子の依存傾向が一貫して高く, 女子の依存傾向には特に注意が必要 (戸部他, 2010) とも言われている。そこで, 本研究では女子中学生を対象に検討する。

女子中学生のネット依存を検討するにあたり, ネット依存とメンタルヘルス上の問題との関連についても検討する必要がある。中学生年代は第二次性徴期にあたり, 心身に様々な変化が表れてくる。発達障害や身体障害など生得的な困難さを抱えている子どもたちにとっては, 生得的な苦手さに伴った情緒的な傷つきなどの二次障害のリスクが大きくなる。また, 生得的な困難さが少ない子どもたちにとっても, 複雑な友人関係など, 思春期特有の困難さに直面するようになり, 上手く対処できない場合は, 心身に異常をきたしたり自らを傷つけたりする場合も見受けられる。したがって, メンタルヘルス上の問題について検討することは重要であると考えられる。本研究では, 中学生のメンタルヘルス上の問題として, 摂食障害傾向と自傷傾向を取り上げる。

やせを称賛するメディアの普及や文化により, 中学生のダイエッターが増加傾向にあり, それに伴って中学生の摂食障害傾向が問題となってきている。摂食障害とは, 拒食や過食といった食行動異常である。特に女子中学生との関連が多く研究者によって指摘されており (向井, 1996), Lewinsohn, Striegel-Moore & Seeley (2000) は, 摂食障害は思春期女子に頻発する心理的問題の1つであると指摘している。思春期であるという事が摂食障害傾向のリスクファクターであるとも言われている (上長・齊藤, 2009)。

また, 近年, 思春期・青年期において大きな問題となっ

ている不適応行動の一つに, 自傷傾向が挙げられる。自傷行為は「明確な自殺目的を持たずに, 意図的に自身の一部に損傷を負わせること (Feldman, 1988)」と定義されている。特に, 思春期・青年期にあたる若者の間で急激な増加傾向にあるのが, 手首自傷症候群であると言われている (角丸, 2004)。角丸 (2004) によると, 自分という存在が分かりづらく, 自己表現のしにくい時代の中で, 自傷行為・自傷傾向は取り組まざるを得ない問題行動であるとされており, 特にアイデンティティの形成や対人関係の形成が大切となる中学生年代においては重大なトピックの1つであると思われる。そこで, 本研究でも取り上げる意義があると考えられる。

以上のことを踏まえて, 本研究では女子中学生におけるネット利用状況を調査した上で, ネット依存と摂食障害傾向, 自傷傾向との関連について検討する。

2. 方法

2-1 調査対象者と手続きについて

調査対象者は, A女子中学の学生310名 (平均年齢13.9歳) であった。調査は2010年11月頃に, 各クラス毎にクラス担任が集団で実施した。本研究の実施にあたっては, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科及び名古屋大学発達心理精神科学教育研究センターにおける研究倫理委員会の承認を受けて実施された。

2-2 質問紙の内容

(1) ネット利用状況

ネット利用状況を検討する上で, 本研究ではネット利用頻度と利用アプリケーションに注目した。ネット利用頻度としては, ネットをどのくらい利用するのかについて, 「利用しない」「月1回あるかないか」「週1回以下」「週1-2回」「週3-5回」「ほとんど毎日」の6件法で尋ねた。また, 利用アプリケーションに関しては, 「メール」「ホームページ」「ブログ」⁽¹⁾「ミニブログ」⁽²⁾「ソーシャルネットワークサービス (以下, SNS)」⁽³⁾「ネット掲示板」⁽⁴⁾「グループウェア」⁽⁵⁾「チャットルーム」⁽⁶⁾「動画」「オンラインゲーム」「その他」といった選択肢を挙げ, 回答の際には具体的なサービス名称を挙げて利用しているアプリケーションに対して, 複数選択による回答を求めた。

(2) ネット依存

ネット依存の尺度としては, 長田・上野 (2005) の日本語版インターネット中毒テスト (以下, Japanese Internet Addiction Test: JIAT) を用いた。JIATはYoung (1998) が開発したInternet Addiction Testの日本語版であり, 様々な国で利用されている国際的なネット依存の

尺度である。質問項目は全20項目からなり、評定は「まったくない」から「常にそうだ」の5件法であった。 α 係数は0.93であり内部一貫性や内容の妥当性も確認されている。本研究での使用にあたり、中学生に適用するには妥当ではないと考えられた質問項目2・3・9を省き、16項目で実施した。本研究における平均点(23.2点)を区分点として低依存群201名(平均16.7点)と高依存群109名(平均35.2点)に分けた。

(3) 摂食障害傾向

摂食障害傾向の尺度としては、Koskelainen, Sourander & Helenius (2001) で使用されている摂食障害傾向を測定する9項目の尺度に2項目加えた全11項目からなる尺度を作成し利用した。評定は「当てはまらない」から「とても当てはまる」の3件法であった。

(4) 自傷傾向

自傷傾向の尺度としては、Matsumoto, Tsutsumi, Izutsu, Imamura, Chiba & Takeshima (2009) で利用された自己自傷行動経験尺度を用いた。質問項目は全5項目からなり、評定は「はい」と「いいえ」の2件法であった。

3. 結果

3-1 ネット利用状況について

本研究ではネット利用状況として、ネット利用頻度と利用アプリケーションについて検討した。ネット利用頻度について集計した結果、63%の調査対象者が1週間に1回以上ネットを利用していることが示された(Figure 1)。ネット依存別に見てみると、低依存群の47%が1週間に1回以上ネットを利用しているのに対して、高依存群では92%が1週間に1回以上ネットを利用していることが示された。ネット依存におけるネット利用頻度についてMann-Whitney U検定を行ったところ、高依存群の方が低依存群よりネット利用頻度が高いことが示された($U = 4335.0, p < .01$)。

利用アプリケーションに関しては、アプリケーションの中で動画が74.19%と最も良く利用されていること

が示された(Table 1)。ネット依存別に見てみると、低依存群では動画の利用が65.17%と一番多いのに対して、高依存群ではブログ(62.39%)やSNS(50.46%)といった多岐にわたるアプリケーションの利用が見られた。

3-2 ネット依存とメンタルヘルス上の問題との関連

各尺度得点の相関を分析した結果、すべての尺度間で正の相関が示された。ネット依存とメンタルヘルス上の問題との相関に注目すると、ネット依存と摂食障害傾向との間でやや弱い正の相関($r = .18, p < .01$)が、自傷傾向との間で中程度の正の相関($r = .36, p < .01$)が見られた。

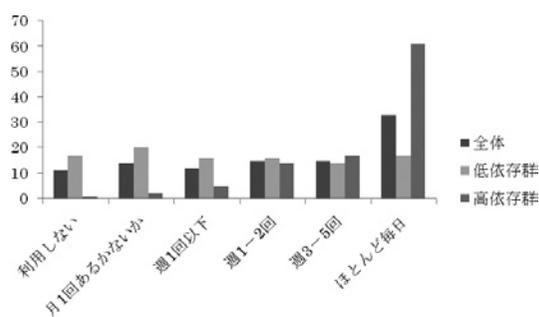


Figure 1 ネット利用頻度

Table 1 依存別・性別におけるアプリケーション利用率 (%) [複数回答]

	全体 (n = 310)	低依存群 (n = 201)	高依存群 (n = 109)
メール	30.00	20.40	47.71
ホームページ	49.03	37.81	69.72
ブログ	37.42	23.88	62.39
ミニブログ	10.65	3.98	22.94
SNS	23.55	8.96	50.46
ネット掲示板	9.68	2.99	22.02
グループウェア	1.29	0.50	2.75
チャットルーム	4.84	2.49	9.17
動画	74.19	65.17	90.83
オンラインゲーム	8.71	5.47	14.68
その他	0.65	0.50	0.92

Table 2 各群における尺度得点の平均と標準偏差, t検定結果

	高依存群	低依存群	t (308)	
摂食障害傾向	20.2 (4.3)	18.5 (3.9)	-3.31**	高依存群 > 低依存群
自傷傾向	6.2 (1.3)	5.6 (1.0)	-4.38**	高依存群 > 低依存群

** $p < .01$

3-3 ネット依存によるメンタルヘルス上の問題の程度の比較

ネット依存の高低における各尺度の程度を比較するために t 検定を行った (Table 2)。検定の結果、摂食障害傾向 ($t(308) = -3.31, p < .01$)、自傷傾向 ($t(308) = -4.38, p < .01$) 共に、高依存群の方が低依存群より、1%水準で高い得点をとることが示された。

4. 考察

4-1 女子中学生のネット利用状況について

本研究の結果、女子中学生の半数以上が1週間に1回以上ネットを利用していることが示され、中学生においてもネット文化が浸透してきていることが示唆された。また、ネット依存別に見てみると、高依存群の方が低依存群よりもネット利用頻度が高いことが示された。ネット依存の大学生はネット使用年数が長いこと (春日・伊藤, 2004) や、ネット利用時間が一日150分以上の短大生はネット依存傾向が強いこと (白石・長光・千田・上野, 2011) が指摘されている。小・中・高校生を対象にした戸部他 (2010) では、20時間以上のネット長時間利用者に対するネット依存の危険性が述べられており、ネット依存に対してネットを利用する時間や頻度が関係していると思われる。しかし、ネット利用時間が長い人やネット利用頻度が高い人の中には、情報収集や勉強等でネットを用いる人も含まれる。彼らはネットに依存しているわけではなく、情報収集や勉強のための一道具としてネットを使用しているため、ネット依存とは異なると考えられる。ネット依存とネット利用頻度は関連しているが、直接的な関連ではなく、利用内容や利用目的が間接的に影響しているかもしれない。この点に関して、今後も慎重に検討すべきだと思われる。

ネットアプリケーションに関しては、動画を利用している女子中学生が多いことが示された。これまで、多くの中学生が日常的に接してきたメディアはテレビであり、テレビから情報を得たり影響を受けたりしてきた (井上・林, 2002a; 井上・林, 2002b; 板倉, 1983)。動画は、映像を投稿したり投稿された映像を見たりすることができるアプリケーションであり、動画視聴はテレビに近い役割を果たしていることが考えられる。その一方で、動画はテレビとは異なり、自分の好きな時に好きな内容を繰り返し視聴することができる。投稿されている動画の内容は極めて多岐にわたっており、大衆向けのテレビに比べて、自分の趣味や関心により近い動画を視聴することが出来る。さらに近年では、自分で動画を作成して投稿したり、投稿されている動画に対して、コメントを付けることが可能となっている。この点において、動画を

視聴する際にはテレビに比べて、より能動的に関わる側面が強いと考えられ、このような動画の特性により、中学生の動画利用が比較的多くなっているのではないかと考えられる。

また、高依存群では多岐にわたるアプリケーションの利用が見られ、特にブログやSNSといった他者とのコミュニケーションを必要とするアプリケーションも利用されていることが示された。ネットのアプリケーションには、チャットやオンラインゲームなどのように双方向的で即時的なやり取りを行うアプリケーションと、Eメールやホームページなどのように一方的に閲覧するアプリケーションがあり、前者のようなネット上で人間関係を築くことができるようなアプリケーションはのめりこみやすく、ネット依存者が日常的に利用していることが指摘されている (Griffiths, 1998; 岡田, 1998)。本研究の結果より、女子中学生においてもネット依存と対人的なネットアプリケーションとの関連が示され、対人的なネットアプリケーションの危険性が思春期・青年期においても影響を及ぼすことが示唆された。

4-2 ネット依存とメンタルヘルス上の問題との関連について

ネット依存とメンタルヘルス上の問題との関連について検討した結果、ネット依存と摂食障害傾向や自傷傾向との間に、中程度からやや弱い正の相関が認められた。また t 検定の結果、摂食障害傾向、自傷傾向共に、高依存群の方が低依存群より高い点数を取ることが示された。ネット依存に陥ることで、対人関係における問題が生じてきたり、日常生活に支障が生じたりと、人間の様々な側面に悪影響を与えることが多くの研究者によって指摘されている (鄭・野島, 2008; 袖山他, 2003)。本研究の結果、ネット依存が女子中学生におけるメンタルヘルス上の問題へのリスクファクターとなりうることを示唆された。

これらの関連に対しては、ネット依存者の対人関係スタイルがメンタルヘルス上の問題に影響を与えている可能性が考えられる。ネット依存の問題として対人関係に関する問題が指摘されている。ネット依存者は、対人関係スキル問題に起因する社会不適応 (鄭, 2008) や対人ストレス (金, 2007) を抱えていたり、機械的な対人関係スタイルを形成したりする (町沢, 1999)。特に女子の方がコミュニケーション系のアプリケーション経験者が多いと言われており (高田・西田, 2003)、女子中学生の対人関係スタイルに、ネット上の対人関係を重視する傾向があることも示されている。ネットに依存することで、現実の人間関係よりもネット上の関係を重視す

る対人関係スタイルを形成していく可能性が考えられる。ネットに依存することで現実的な対人関係が希薄になり、困った時に相談できる人がおらず、ネット上で相談して誤った情報を得てしまうことが予想される。その結果、自傷傾向がネット上で肯定されたり、過度なやせ傾向が賞賛されて摂食障害傾向が進んだりするかもしれない。

一方、対人関係が乏しいことでメンタルヘルス上に問題が生じ、それによってネット依存が助長される可能性も考えられる。摂食障害を持つ患者は母子関係だけでなく広く対人関係に歪みを生じている傾向があること（櫻井, 2006）や、対人関係上の問題を抱えている女子中学生が、その問題を解決し、他者に認めてもらう手段として、体重や体型をコントロールしようとする傾向があること（前川・眞榮, 2010）が示されている。また、自傷傾向の高い者は、社会性が乏しいために人間関係がうまくいかず、問題を起こしやすい（角丸, 2004）と言われている。パーソナリティ的な対人関係の難しさからメンタルヘルス上の困難を抱え、対処行動や人となつがりを求めるために匿名性が高くコミュニケーションが取りやすいネットへと耽溺していくのかもしれない。

4-3 まとめと本研究の限界

現在のところ、日本においてネット依存の認知度は低く、研究も少ない。しかし、近年になってネットが日常生活に浸透してきたことで、ネット依存に関する研究を行うことには大きな意義があると考えられる。特にネットに触れる機会の多くなる中学生、その中でも依存傾向が高まりやすい女子中学生に対するネットの影響といった知見を提案できた点で、本研究は意義が大きいと思われる。

最後に、本研究の限界を述べる。本研究では、JIATの尺度得点の平均値を区分点として、高依存群を設定した。そのため、本研究の高依存群をネット依存者と同列に考えることは慎重でなければならないと思われる。本研究の高依存群が実際のネット依存者とは異なる可能性や、今回の結果が実際のネット依存者に当てはまらない可能性も考えられる。今後、より詳細に中学生に対するネット依存について検討することが必要である。

本研究では女子中学生のネット利用率等を考慮して女子中学生を対象に実施した。今後、男子中学生や小学生、高校生に対しても検討し、比較することが必要であると思われる。

また本研究では、中学生におけるメンタルヘルス上の問題として摂食障害傾向と自傷傾向の2点を取り上げたが、中学生における問題としては他にも様々な問題が挙

げられている。そのため、他のメンタルヘルス上の問題に関しても検討していくべきであろう。

引用文献

- American Psychiatric Association (2000). *Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-IV-TR*. England: American Psychiatric Association. (高橋三郎, 大野裕, 染矢俊幸 (2002). DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院)
- 安藤明人 (1999). インターネット依存とインターネット・ギャンブル 武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集編集委員 (編) 武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集 和泉書院
- 安藤玲子・坂元章・鈴木佳苗・森津太子 (2003). コミュニケーション・メディアと孤独感・対人不安 日本心理学会第67回大会発表論文集, 207.
- 安藤玲子・高比良美詠子・坂元章 (2008). ネット使用がソーシャルサポートの提供に与える影響 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, No.17, 34-35.
- Cao, F. L., Su, L. Y., Liu, T. Q., & Gao, X. P. (2007). The relationship between impulsivity and Internet addiction in a sample of Chinese adolescents. *European Psychiatry*, 22, 466-471.
- Feldman, M. D. (1988). The challenge of self-mutilation *Comprehensive Psychiatry*, 29, 252-269.
- Griffiths, M. (1998). Internet addiction: Does it really exist? In J. Gackenbach (Ed.) *Psychology and the Internet*, San Diego, CA: Academic Press, 61-73.
- Ha, J. H., Kim, S. Y., Bae, S. C., Bae, S., Kim, N., Sim, M., Lyoo, I. K. & Cho, S. C. (2007). Depression and Internet addiction in adolescents. *Psychopathology*, 40, 424-430.
- 人見一彦 (2006). 臨床精神医学30年の経験 近畿大学医誌, 31, 1-7.
- 井上史子・林徳治 (2002a). 中学生の情報活用能力の育成を図る授業実践 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 14, 237-246.
- 井上史子・林徳治 (2002b). 中学生の情報活用能力を育成する授業の実証研究 (1) 日本教育情報学会年會論文集, 18, 190-193.
- 板倉安正 (1983). 中学生のテレビジョン観—その技術教育的視点— テレビジョン学会誌, 37, 1037-1039.
- 角丸歩 (2004). 大学生における自傷行為の臨床心理学的考察 臨床教育心理学研究, 30, 89-105.

- 上長然・齊藤誠一 (2009). 中学生の形態的变化, 抑うつ傾向と摂食障害傾向の時間的関連性 神戸大学大学院人間発達環境学研究所 研究紀要, 3, 11-18.
- 春日伸予・伊藤克人 (2004). 芝浦工業大学生のインターネット依存に関する調査研究 芝浦工大研究報告人文系, 38, 53-57.
- 金昭英 (2007). インターネット依存と孤独感・「対人ストレス」イベントの関係について 臨床教育心理学研究, 33, 1.
- Koskelainen, M., Sourander, A. & Helenius, H. (2001). Dieting and weight concerns among Finnish adolescents. *Nordic journal of psychiatry*, 55, 427-431.
- Lewinsohn, P. M., Striegel-Moore, R. H. & Seeley, J.R. (2000). Epidemiology and natural course of eating disorders in young women from adolescence to young adulthood. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 39, 1284-1292.
- 前川浩子・眞榮城和美 (2010). 女子中学生の体重や体型へのこだわりと対人関係に関する研究 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, No.19, 127.
- 町沢静夫 (1999). 現代ストレスの状況と展望 河野友信・久保木富房 (編) 現代のエスプリ別冊 現代のストレスシリーズⅢ 現代的ストレスの課題と対応 至文堂
- Matsumoto, T., Tsutsumi, A., Izutsu, T., Imamura, F., Chiba, Y. & Takeshima, T. (2009). Comparative study of the prevalence of suicidal behavior and sexual abuse history in delinquent and non-delinquent adolescents. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 63, 238-240.
- 文部科学省 (2002). 情報化が子どもにも与える影響 (ネット使用傾向を中心として) に関する調査報告書.
- 向井隆代 (1996). 思春期女子における身体像不満足感, 食行動および抑うつ気分: 縦断的研究 カウンセリング研究, 29, 37-43.
- 中西摩衣 (2005). 青少年期におけるインターネットの利用と解離心性との関連についての一考察 研究助成論文集, 41, 115-124.
- 岡田努 (1998). はまる—インターネット中毒 現代のエスプリ, 370, 167-176.
- 長田洋和・上野里絵 (2005). 日本版インターネットアディクションテスト (JIAT) の有用性の検討 アディクションと家族, 22, 269-275.
- 櫻井登世子 (2006). 接触行動におよぼす親子関係の影響 田園調布学園大学紀要, No.1, 127-138.
- 佐藤武・中島久美子・木道圭子・山田茂人 (2006). 情報化社会における学生のメンタルヘルス: インターネット中毒の有病率と心理的状態 総合病院精神医学, 18, 131-138.
- Shaw, L. H. & Gant, L. M. (2002). In defense of the Internet: The relationship between Internet communication and depression, loneliness, self-esteem, and perceived social support. *Cyberpsychology and Behavior*, 5, 157-171.
- 白石龍生・長光李恵・千田幸美・上野奈初美 (2011). 携帯電話の使用と自尊心との関係 大阪教育大学紀要 第三部門 自然科学・応用科学, 60, 51-56.
- 袖山紀子・畑中公孝・堀孝文・朝田隆 (2003). いわゆる「インターネット中毒」の1例 精神医学, 45, 995-997.
- 総務省統計局 (2011). 平成22年度通信利用動向調査の結果.
- 鈴木佳苗・坂本章・小林久美子・安藤玲子・檀淵めぐみ・木村文香 (2003). インターネット使用がソーシャルスキルに及ぼす影響 パネル調査による評価研究. 日本教育工学会雑誌, No.27 (Supple), 117-120.
- 高比良美詠子・安藤玲子・坂本章 (2004). ネット利用が中学生のネガティブ感情および攻撃性に与える影響 (2) 一目的別ネット利用のネガティブ効果—日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 13, 84-85.
- 高田泰昭・西田英樹 (2003). 小中学生のインターネット利用状況に関する研究 鳥取大学教育地域科学部紀要 教育・人文科学, 5, 45-51.
- 高石浩一 (2006). ネット依存と若者文化 日本学生相談学会第24回大会ワークショップ資料.
- 鄭艶花 (2008). インターネット依存傾向と日常的精神健康に関する実証的研究 心理臨床学研究, 26, 72-83.
- 鄭艶花・野島一彦 (2008). 大学生の〈インターネット依存傾向プロセス〉と〈インターネット依存傾向自覚〉に関する実証的研究 九州大学心理学研究, 9, 111-117.
- 寺戸武志・永浦拡・富永良喜 (2010). 中学生における情報機器の利用状況およびネットいじめ経験の実態調査 発達心理臨床研究, 16, 89-106.
- 戸部秀之・堀田美枝子・竹内一夫 (2010). 児童生徒のインターネット, テレビゲーム依存傾向尺度の構成と, 小学生から高校生にかけての依存傾向尺度値の

横断的变化 人文・社会科学 埼玉大学紀要 教育学部, 59, 181-199.

- 内海しよか (2010). 中学生のネットいじめ, いじめられ体験—親の統制に対する子どもの認知, および関係性攻撃との関連— 教育心理学研究, 58, 12-22.
- Yen, J. K., Ko, C. H., Yen, C. F., Wu, H. Y. & Yang, M. J. (2007). The comorbid psychiatric symptoms of Internet addiction: Attention deficit and hyperactivity disorder (ADHD), depression, social phobia, and hostility. *Journal of Adolescent Health*, 41, 93-98.
- Yoo, H. J., Cho, S. C. & Ha, J. (2004). Attention deficit hyperactivity symptoms and Internet addiction. *Psychiatry Clin Neurosci*, 58, 487-494.
- Young, K. S. (1998). *Caught in the net : how to recognize the signs of Internet addiction and a winning strategy for recover*. New York: John Wiley & Sons. (小田嶋由美子 (訳) (1998). インターネット中毒—まじめな警告です— 毎日新聞社)
- Willoughby, T. (2008). A short-term longitudinal study of internet and computer game use by adolescent boys and girls: Prevalence, frequency of use, and psychosocial predictors. *Developmental Psychology*, 44, 95-204.

脚注

- (1) ウェブ上に覚書や論評, 日記などを記録するページ。
- (2) ブログの一種で, 自分の状況や雑記などを短い文章でウェブ上に記録するページ。
- (3) 人と人とのつながりを促進・サポートする, コミュニティ型の会員制のサービス。
- (4) コンピュータを使用した環境で, 記事を書き込んだり, 閲覧したり, コメントを付けられるようにした仕組み。
- (5) ネットで情報の交換や共有ができるようになっているシステム。
- (6) リアルタイムで参加者が文字・絵・映像・声などの入力を通して行うコミュニケーションシステム。

〈付記〉 本論文をまとめるにあたり, ご指導いただきました Department of Child Psychiatry, Turku University Andre Sourander 教授, および, 研究にご参加いただいた皆様に心より感謝を申し上げます。また, 本研究は電気情報通信財団の研究助成を受けた。

(2012年8月31日受稿)

ABSTRACT

The frequency of Internet use among the female junior high school students and the association between Internet addiction and mental health problems

Aya YAMAWAKI, Masayoshi OGURA, Shoko HAMADA, Shuji HONJO and Hitoshi KANEKO

This study aimed to examine the frequency of Internet use in female junior high school students. Further, we examined the association between Internet addiction (IA) and mental health problems such as eating problems and self-injurious behavior experiences (self-cutting). The participants were 310 female junior high school students (mean age: 13.9 years), who were required to complete the Japanese Internet Addiction Test (JIAT), and scales on eating problems and self-injurious behavior experiences (self-cutting). Approximately 60% of the participants used the Internet once a week or more. Moreover, they often used moving images among other Internet application software. As a result of t-test, the high-IA group showed the higher tendency of mental health problems than the low-IA group. Our findings suggest that female junior high school students were familiar with the Internet. The Internet might be a risk factor in aspects of mental health problems. These associations might be influenced by the interpersonal relationship styles of high-IA people.

Key words: Internet use, Internet Addiction, female junior high school students, mental health problems